第一章　出会いと秘密の夜

――もし、あの日、薬を飲み忘れなければ。私と朔夜くんの関係は、ずっと、ただのクラスメイトのままだったんだと思う。

放課後の静まり返った第三訓練場で、私は一人、大きくため息をついた。

「はぁ……。またやっちゃった。的を綺麗に射抜くはずが、粉々に粉砕しちゃうなんて」

私の取り柄は、机に向かってガリ勉することだけだ。座学の成績は学園トップを維持しているけれど、それは運動音痴で実技がポンコツなのを隠すための必死のカムフラージュに過ぎない。魔力量だけは無駄に桁外れにあるせいで、加減を知らない私の魔法は、いつも繊細さのかけらもない、ただの物理的な暴力になってしまう。

今日の属性魔法の授業でも、私は散々だった。みんなが火や風を華麗に操るなか、私だけは属性が宿らず、ただの魔力の塊をぶつけて的を物理的に粉砕するだけ。教官には「君の魔力は強力だが、美しさがない」と呆れられてしまった。

それに比べて、学園一の有名人、朔夜（さくや）くんの魔法はため息が出るほど綺麗だった。

「朔夜様、今の術式どうなってるんですか？」

「朔夜くん、放課後もしよかったら……！」

授業が終わるなり、彼の周りにはいつも通り女子生徒たちの輪ができる。彼は相変わらずクールな顔であしらっていたけれど、その中心にいる姿は、遠くから見ているだけの私とは住む世界が違うように見えた。

彼は学園中の女子生徒が憧れるほどの美貌を持ち、身長が高く、得意とする氷魔法がよく似合う青い髪と透き通るような水色と青の瞳。けれど、

どんな告白も「興味ねえ」と一蹴するほど魔法の修練にしか関心がない。

氷を操る白くてしなやかな指先は、見ているだけで見惚れてしまう。

……それなのに、呪文を放つ瞬間に制服の袖からチラリと覗く腕は、男の人らしくて、驚くほどたくましかった。

もしも、あの強そうな腕で逃げられないようにギュッと抱きしめられたら。耳元であの低い声に、意地悪なことをささやかれながら熱い息を吹きかけられたら。いつも冷たい彼が、私だけに見せる獣みたいな独占欲を剥き出しにして、強引に服を脱がせてきたら……。

私は妄想癖があり、最近は朔夜くんのことばかり考えてしまう。話しかける度胸もない癖に。

入学直後、実力を試す実技試験でのことを思い出す。対戦相手だった朔夜くんが張った、鉄壁のはずの補助魔法の結界。私はそれを、ただの物理魔法で木っ端微塵にぶっ飛ばし、あろうことか場外の備品まで破壊してし

まった。

当然のようにルール違反で失格。呆然とする周囲をよそに、彼が吐き捨てた。

『……ふん、ただ魔力値が馬鹿高いだけだろ』

冷ややかな呟きが、今も耳にこびりついている。

属性すら扱えない脳筋の出来損ない。彼はあの日、きっとそう思ったはずだ。

朔夜くんが得意なのは、鋭く美しい氷の魔法と、鉄壁の守りを誇る結界術などの補助魔法だ。学園内でもトップクラスの強度を誇る彼の結界を、力技で破壊できるのは私だけだった。

けれど、私は補助魔法なんて何一つ使えない、ただ生まれ持った魔力量が桁違いに多いせいで、どんな高度な結界も内側から叩き壊したり、無理やり吹っ飛ばしたりできてしまうだけだ。そんな異常なまでの力技を、周

りの同級生たちは最初は唖然としていたが、真面目に勉強して座学でトップクラスの成績を取ることで、今では本物の天才だと思い込んで尊敬してくれている。

朔夜くんもその一人だ。最初こそ冷ややかな呟きを残したが、彼の結界を壊し、座学で彼と同等の成績を残してる私のことを、自分と対等に渡り合える唯一の存在だと信じているようだった。

きっと今ではライバルとして認めてくれている……でも、本当の私を知ったら、幻滅するに違いない。

「……何を考えてるの、私は！　落ち着け、自分！　訓練に戻るのよ！」

慌てて自分の頬を両手でパチンと叩いたけれど、何かがおかしい。

頬を叩いた自分の手のひらが、やけに熱い。心臓がうるさいくらいに脈打ち始めて、身体の奥がじんわりと、ドロドロに溶けるような熱を帯びていく。

「あれ……？　なんだか、急に……」
そこで私は、血の気が引くような事実に気づいた。
勉強に全神経を注ぎすぎて、今朝飲むはずだった抑制剤を飲むのを、完全に忘れていた。
私の桁外れな魔力は、一度出口を失って暴走し始めるため、毎日決まった量の抑制剤を飲んでいる。
「……嘘。飲み忘れ、ちゃった……。……あ……あつい……」
真面目な優等生のフリをしていた私の理性が、内側から溢れ出す熱でボロボロと崩れ落ちていく。
魔法学園の放課後。夕闇が差し込む第三訓練場は、異様な熱気に包まれていた。
「はぁっ、はぁっ……あつい……身体が、溶けちゃう……」
私は冷たいコンクリートの床に両手をつき、必死に荒い息を吐き出して

いた。
私の魔力量は、他の生徒とは比べものにならないほど桁外れだ。学園でもトップクラスの成績を維持できているのはその恩恵だけど、実は誰にも言えない秘密があった。
魔力が高まりすぎて暴走すると、それがそのまま激しい性欲に変わってしまうのだ。
一度暴走が始まれば、頭の中はエッチなことでいっぱいになり、いつもの冷静さはどこかへ飛んでいってしまう。しかも、最低でも二回、三回とイかない限り、この暴走は止まらない。
「う、あ……やだ……身体が勝手に……♡」
ドクン、ドクンと心臓がうるさく脈打つ。
暴走した魔力が全身を駆け巡り、着ている制服のブラウスが肌に触れるだけで、背中にゾクゾクとした痺れが走った。

膝をついた拍子に、長いポニーテールが肩からさらりとこぼれ落ちる。
前かがみの姿勢のせいで、大きな胸の重みがはっきりと伝わってきた。
短いスカートの裾からは、自分の太ももが露わになっている。
ぐちゅ♡
下着が重い。
太ももの内側を、熱くてドロドロとした液体が伝い落ちていく。そのぬるりとした感触が、さらに私をエッチな気分にさせていく。
普通の生徒には絶対に起きない、私だけの、恥ずかしすぎる体質。
「……ひゃ、あ……。だれか、たすけて……♡」
私は震える手で、苦しくてたまらないブラウスの第一ボタンを外した。
はだけた襟元から、熱を帯びた肌と、自分でも驚くほど重みを増した胸の膨らみがこぼれそうになる。
――このままじゃ、本当におかしくなっちゃう。

誰もいないし……ここで、自分でしちゃう……？
指先を下着のラインに這わせて、熱く濡れそぼった場所を確かめてみる。
じゅぷ……。
淫らな音が静かな訓練場に響いて、私は恥ずかしさで顔を覆った。けれど、一度火がついた身体はもう止まらない。
「だめ、もう我慢できない。……はぁ……あつい……♡」
意を決して、スカートの中に手を滑り込ませようとした、その時だった。
ガチャン、と重厚な鉄扉が開く音がした。
「……まだ残ってんのか」
低く、温度は低いけれど、その奥に確かな芯を感じさせる声。
「!?」
そこに立っていたのは、私の憧れの人……。朔夜くんだった。
最悪だ。せっかくここまで頑張って、対等な関係になったのに。自分で

魔力を操ることもできず、毎日必死に薬で制御してることは誰にも言ってない……。実技がろくにできない上に、こんな姿を見られたら幻滅されるかも……。

そんな私の情けない内情も知らず、彼は別のブースで「アイツに追いつくには、まだ足りねえ」と一人で自分を追い込んでいたのだろう。ようやく練習を切り上げようとした矢先、扉の奥で信じられないほど乱れている私の姿を見つけてしまったのだ。

トレーニングウェアにタオルをかけた姿。

朔夜くんは一瞬で、床に這いつくばる私の異変を察知して、その端正な顔を険しくこわばらせた。

「……どうした、その格好。……怪我か？」

彼はすぐさま駆け寄って、私の傍らに膝をついた。

いつもは真面目だけが取り柄の優等生の私が、胸元をはだけて床に伏し

ている。その異常事態に、彼の瞳には隠しきれないほどの鋭い動揺が走っていた。

「魔力が、暴走、しちゃったの……」

「暴走……？　お前の魔力が？　待て、顔が赤すぎるだろ。熱があるのか？」

朔夜くんは心配そうに、大きな手で私の額に触れようとした。

私の身体から溢れ出し、周囲に渦巻く甘ったるくて粘り気のある魔力を肌で感じ取った瞬間、彼は息を呑んで動きを止めた。

朔夜くんが目の前にいる。いつも見てるだけで、話しかけることもできなかった、あの、憧れの朔夜くんが……。そして、私に触れようとしてくれた。こんなこともう一生ないかもしれない。

毎日、毎日、朔夜くんと話せたら、もっと仲良くなれたら、私に触れてくれたら……それはどれだけ幸せなことだろうと妄想してきた。

魔力暴走も伴い、体が疼いてたまらない。ああ、もうどう思われてもいいから、幻滅されてもいいから……彼に触れて欲しい。

私は漏れそうな吐息を必死に抑えながら、今まで誰にも言えなかった秘密を、震える声で打ち明ける。

「わたし……魔力が多すぎて……。暴走すると、脳が、エッチなことしか……考えられなくなっちゃうの……♡いつもの冷静さも、どこかにいっちゃって……♡」

「エッチなこと……？」

「そうなの……♡ちゃんと、二回……三回と、イかせてもらわないと……止まらないの……♡お願い、朔夜くん……助けて……♡」

朔夜くんは絶句した。

こんな体質を一人で抱えていたなんて、彼は思いもしなかったんだろう。

一瞬、戸惑うように視線を泳がせたけれど、すぐにその瞳には、重くど

ろりとした熱が宿った。
「……そんな体質だったのか。……一人で、ずっと耐えてたんだな」
私の頬を包み込む彼の手のひらは、すごく優しくて……。
は力がこもっていて、強い意志が伝わってくる。
「……安心しろ。ここには俺とお前しかいねえ。俺以外、誰にもお前のこんな姿、見せないようにしてやる」
朔夜くんは空いた手で、指先をスッと弾いた。
パリン、と硬質なガラスが割れたような音が響き、広大な訓練場の入り口に強力な結界が展開される。
外の雑音は完全に消え、夕闇の影が深く落ちる室内は、あっという間に二人きりの密室へと変貌した。
「……これでいい。ここなら、誰もお前のこんな姿を見られねえ」
朔夜くんはそう低く呟くと、私から視線をふいと逸らした。

結界を張った直後の静寂が室内に満ち、外の風の音も、遠くの校舎から聞こえる物音もすべて消え去っていく。

「俺は、お前が落ち着くまで見張ってる。結界は誰にも破らせねえから、安心しろ」

彼はトレーニングウェアのポケットに手を突っ込み、私に背中を向けたまま、じっと入り口の方を見据えた。

私のことを一目置いてくれているからこそ、彼は私の恥ずかしい姿を無理に覗こうとはしなかったのだろう。ただひたすらに、私のプライドと安全を守るために、頼もしい背中を見せて立ってくれている。

「……あ、あ……朔夜くん……♡」

けれど、その不器用な優しさと、揺るぎない背中のかっこよさが、暴走している私の情欲にさらなる火をつけた。

目の前には、ずっと憧れていた、凛々しくて強い朔夜くんの後ろ姿。

氷の魔力を纏う彼の冷たい体温を想像するだけで、喉の渇きを癒やすための唯一の毒薬を求めているみたいに、身体が熱く疼いてしまう。普段の自分じゃ絶対考えられない大胆な行動が、今の自分なら……なんでもできそうな気がした。

「……やだ、まって……♡ひとりじゃ……だめなの……♡」

私は震える膝で床を這い、すがるように彼のガッシリとした脚に抱きついた。

「おい。何やって……離せ。今は危ねえだろ」

朔夜くんの声が、低く、苦しげに震える。

背中越しにも伝わっているはず。私の身体から溢れる、この甘ったるくて、自分でも嫌になるくらい濃密な魔力の香りが。

朔夜くんの大きな手のひらが白くなるほど固く握りしめられているのが見えて、彼が必死に理性を繋ぎ止めてくれているのがわかって……それが

余計に、私を狂わせた。
「やだ……。朔夜くん、お願い……こっち向いて……♡」
震える腕で、必死に彼の腰からたくましい二の腕へと縋り付いた。
そのまま正面に回り込むようにして胸元に飛び込むと、はだけたブラウスの隙間から、熱を帯びて苦しいほどに張った私の胸が、こぼれ落ちそうなほど露わになる。
ぐにゅっ♡
密着した拍子に、柔らかい感触が彼の硬い胸板に押し潰され、深い谷間がくっきりと形作られた。
「……!? お前……あ……」
至近距離で、涙を溜めた私の視線と、はだけた胸元から覗く熱い肌を突きつけられて、朔夜くんが喉を鳴らして息を呑んだ。
「あ……朔夜……くん……♡」

目の前の彼が、苦しそうに、でも逃げられないほど強い視線で私の胸元を凝視しているのがわかって。

私はさらに大胆に、彼の太い腕に自分の胸を押し付けた。

「おっぱい……魔力がたまって、ぱんぱんで……苦しいの……♡朔夜くんの手、つめたいから……さわって、冷やして……♡」

「……お前……そんな……」

魔法の修練にしか興味がなかったはずの彼が、私のわがままに翻弄されて、今にも理性が千切れそうになっている姿。それが、暴走している私の身体をさらに甘く疼かせた。

「……いいんだな。後悔しねえな」

彼は自分に言い聞かせるように低く呟くと、意を決したように大きな手のひらを伸ばした。

熱を帯びてはち切れそうな私の胸が、彼の冷たい手に包み込まれる。

むにっ♡

「ひゃぅっ!? ん、んん……♡♡」

ひんやりとした彼の体温が肌に触れた瞬間、あまりの気持ちよさに背中がゾクゾクとした痺れで満たされた。

「……あ、あっ、い……♡」

朔夜くんは驚いたように呟きながら、慎重に、でも欲張りに肉感を楽しむように指を食い込ませた。

柔らかな膨らみが彼の大きな手の中で形を変え、はだけたブラウスがはだけるたびに、彼の瞳がさらに昏く、熱く染まっていく。

「ん、ぁ……もっと……強く、にぎって……♡朔夜くん、おねがい……♡♡♡」

ぐにゅっ、ぐちゅう……♡

彼の大きな手の中で、私の柔らかな肉が指の間から溢れ出し、形を変え

ていく。
「……こんなに熱くなって……鼓動が、俺の手にまで響いてくるぞ」
朔夜くんの声は上擦っていて、私を包み込む大きな手も、わずかに震えているのが伝わってきた。
いつも魔法の修練にしか興味がなくて、女子からの告白も冷たくあしらっていた彼が、いま、私の肌に触れて、こんなにも余裕を失くしている。
「あ……朔夜くん……♡つめたい……きもちいい……♡」
「脱がすぞ…？　いいか？」
朔夜くんが、震える指先で私のブラウスを肩から完全に押し広げ、下着のホックに手をかけた。
「……うん♡お願い♡」
パチン……♡
ホックが外れる軽い音と一緒に、締め付けられていた胸が解放されて、

ぷるんと夕闇の中で跳ねる。
白くて、先端が真っ赤に熟れきった私の乳首が、彼の目の前に完全にさらけ出された。
「……!!　……すごいな」
朔夜くんは息を呑んで、食い入るように私の胸を見つめている。
氷の魔法を操る彼の、ひんやりとした冷たい指先が、固くなっている乳首に、おずおずと触れた。
コリ……コリコリッ♡
「ひ、あぁっ♡♡♡そ、こ……だめぇ……！　じんじん、しちゃう……♡」
「だめか？　……でも、お前、今すごく……辛そうな声出してた。……もっと、楽にしてやりたい……」
不慣れな手つきなのに、熱いところを的確に、冷たい指先で弄り回され

る。

熱と冷たさが交互に襲ってきて、脳に直接快感が突き抜ける。

「あっ……♡つめたい……のに、あつい……♡」

氷の魔力を纏う朔夜くんの指先が、熱りきった私の乳首をコリコリと弾くたび、火照った身体に冷たい刺激が突き抜けて、頭の中が真っ白になる。

ぐにゅぅ♡コリコリ♡

彼はもう片方の手でも、重みを増した私の胸を根元から力強く揉みしだいた。大きな手のひらの中で、私の柔らかな肉が指の間から溢れ出し、ぐにゅぐにゅと淫らな音を立てて形を変えていく。

「……すごいな。俺が触るたびにどん乳首かたくなっていく…」

朔夜くんの声は上擦っていて、私を見つめる青く透き通った瞳は、もう熱い独占欲でとろけそうになっている。

あの朔夜くんが、いま、私の胸を夢中で弄り回して、その感触に夢中に

なっているのが伝わってきて……。

「ん、あぁっ……♡朔夜くん……♡おっぱい…だけじゃ…足りないの……♡」

私は熱い吐息を漏らしながら、自分の胸を力強く揉みしだいている朔夜くんの大きな手に、震える指先を重ねた。

氷の魔力を纏った彼の体温は、燃えるような私の肌を冷やしてくれる唯一の特効薬みたい。

「足りないって……。これ以上、何を……」

※これより先は購入後に閲覧可能です